

事故を防いで挑戦を支える 医療安全管理部の取り組み



金沢大学附属病院 副院長
医療安全管理部 部長

谷内江 昭宏氏
やちえ あきひろ

- 1979年 金沢大学医学部卒業、同小児科学教室入局
- 1983年 米国国立衛生研究所客員研究員
- 1996年 金沢大学医学部小児科助教授
- 1997年 金沢大学医学部保健学科教授
- 2008年 金沢大学医薬保健研究域医学系小児科教授
- 2009年 金沢大学学長補佐
- 2012年 金沢大学附属病院副院長
- 2019年 定年により小児科主任教授を退職、現職に

高度化・複雑化が進む医療現場。それはときに予期せぬ医療事故を引き起こし、不幸な結末を招いてしまうことがあります。安全で質の高い医療をいかにして実現していくか。金沢大学附属病院の取り組みを、医療安全管理部の谷内江部長に伺います。

特定機能病院は最後の砦 医療の高度化が事故リスクを高める

医療過誤や医療事故という言葉をとくとき耳にされるかと思いますが、この2つの言葉はイコールではありません。医療過誤とは人為的ミスによって患者さんが被害を受ける場合を言い、医療事故とは医療過誤だけでなく、医療の過程で起こった不可抗力的な事故などもすべて含めたものを指しています。

このような医療事故の発生を可能な限り防いで、安全安心な医療をお届けするべく活動しているのが医療安全管理部です。本院は数年前からこうした取り組みに注力しており、当時小児科の主任教授であった私は兼任で担当してきましたが、昨年定年退職したのを機に、現在は専従で当部長を務めています。

安全管理が重視され出したのは、重大な医療過誤が幾つかの病院で発生したからですが、その背景にあるのは医療の高度化であり、社会の高齢化。昔であれば治せなかった病気が治せるようになったために、最後の砦とも言われる本院のような特定機能病院へ、病気を複数抱えた難しい患者さんや大変高齢の方などがいらっしゃるようになりま

手術自体が複雑で難しいものですし、合併症も起こりやすく、入院そのものもリスクになります。患者さんが思わぬ場所へ転倒・転落したり、薬を間違えて飲んだり、入院による環境変化で認知症が進んだり。また、作業の複雑化によってスタッフが常時緊張を強いられる上、そこにオーバーワークが加わると事故の確率が層高まってしまう。こうした状況を避け、きちんとしたガバナンスの下に安全管理体制を構築することが強く求められるようになったのです。

小さなミスも見逃すことなく 次に生かす仕組みづくりを

本院の医療安全管理部は、医師や看護師、薬剤師などで構成するチームを軸に活動しており、各診療科部門の代表者が集うカンファレンスも定期開催しています。事故に至る前段階の小さな気づきなどを全院からつぶさに収集。また、万事故が起きた場合には原因究明を徹底的に行つて次に生かすよう努めています。

最近の取り組みをご紹介します。まずは「Rapid Response Team」。これは院内に何か急変があったときに即座に駆けつける医療チームです。同様の取り組みを数年前から行ってきたのですが、

メンバーを特定していなかったために機能しにくいとの反省があり、ICUのスタッフを中心に新チームを結成。機動力のある利用しやすいものとなりました。また、CTなどの造影剤によるアナフィラキシーショックが多発していることから、その対応策の整備も進めました。今まで造影剤を利用しても何も異常のなかった方がいきなり発症する例が多く、前例に倣っていると思わぬ落とし穴に落ちてしまいかねません。時代とともに状況はどんどん変化しているので、常に細心の注意を払い、変化にしっかりと対応していくことが重要です。

各科の人や機能を繋ぎ合わせ 安全で質の高い医療を目指す

私たちの仕事でもう一つ大事なものは、臓器別の診療科を横断的に繋ぐという仕事です。病名を特定できない患者さんや、仮に特定できても合併症をいろいろ抱える複雑な患者さんが多い昨今は、臓器別だけでなく包括的に捉える視点が不可欠。当部では診療科間の連携強化を通じて全体像の理解に努めています。

幸い私は小児科医で、体全体を診るということを長年行ってきたせいか、こうした仕事がかつくりきっているように感じます。複数の診療科が密接に関わりあうカンファレンスなどを実施しつつ、次に繋がる安全管理を追究しています。

「後医は名医」とは、後で診る医師の方がより的確に診療できるため名医に見えてしまうとの格言ですが、それは医療安全管理にも言えることです。最初は予測が難しくても、後で振り返るとわかる事が多くあります。日々の現場で悩み、勉強し、軌道修正しながら次の医療のために解決の糸口を探る毎日です。今後も金沢大学の優秀な人材や機能を繋ぎあわせ、トータル力で本院ならではの方法を見出し、いきたいと思います。それはきっと最高水準の医療への挑戦を支えるものでもあると考えています。

複数診療科が関わる事例

